「勉強ってなあに？」

秋の夜長、読書にはまっている高野です。それも亡父の「教育」のお陰です。
父は私が生まれてくるのが待ち遠しかったようで、生まれて首が据わると同時に中洲のクラブに連れて行ってくれたそうです。そんなことをする一方で、物心つくと毎日のように「生涯勉強だぞ」って言う人でした。
「勉強ってなあに？」
「良い本を読んで、いい文章を書くことだ！」
「良いい本って何？」
「読めばわかる」
この姿勢は生涯徹底していました。父はどんな経済状態でも月に一度は大きな本屋さんに連れていき、3 人の子どもにこう命じました。
「今から 1 時間時間をやる。好きな本を好きなだけもってこい」
言われた通り好きなだけ本を買ってくれたのでした。
高額な専門書を買ったのに、全く読まなかったりもしました。怖くなって「読んでないけど怒らないの？」と聞くと「いつか読むならそれで良い、お前が本当に興味関心をもってその本を読んだとき初めてその本がお前の血となり肉となる。本はムダにならない」と言いました。
残念なことに、私は父が望むほど勉強は出来ませんでしたが、学ぶことは大好きで、今の仕事に役立っています。
そんな父が亡くなった時、郵送である本が送られてきました。アマゾンなんかまだない時代です。温泉旅館の女将、佐藤幸子さんが書いた「おかみ」という本で、開くと最初にこう書かれてありました。
「若旦那さん、失敗も出来ないような人にならないでね。築地の料亭の女将に私が青年の頃、そう言われた。その言葉は山あり谷ありの人生の中で私が決断に迫られたときに、いつも生きた。」
失敗を恐れるなというメッセージを最後の最後まで伝えたかったのでしょう。
そんな経験があったからか、最近読んだ「サイゼリヤの法則」に載っていた母から息子（サイゼリア社長）への手紙に目頭を熱くしました。
「大きなことを成し遂げるために力を与えてほしいと神に求めたのに、謙虚を学ぶようにと弱さを授かった。偉大なことをできるようにと健康を求めたのに、より良きことをするようにと病気を賜った。幸せになろうとして、富を求めたのに、懸命であるようにと貧困を授かった。世の人々の賞賛を得ようと成功を求めたのに、得意にならないようにと失敗を授かった。」
これはアメリカ南北戦争時の兵士の詩だそうで、株式を店頭公開する息子への戒めの言葉として送ったようです。
いつの時代も親は子どもに生きる術、「教育」という財産を残したいのだなって思いました。私もかくありたいものです。